

# 2025年度 事業報告

〔 2025年 4月 1日から  
2026年 3月 31日まで 〕



学校法人立教女学院

はじめに

2025年度事業報告にあたって

立教女学院は、2025年9月1日に、創立148周年を迎えました。「キリスト教に基づく女子教育」という建学の精神を堅持しながら、杉並区久我山のキャンパスで、小学校から高等学校まで12年間の初等・中等教育を展開しております。

2025年度、「立教女学院ビジョン2032」については、2026年度以降の施設整備計画について、設計者を選定し、新棟建設の基本計画および学内機能再配置の基本設計を依頼しました。

また、2027年の創立150周年に向けて、全児童・生徒からデザインを募集して記念ロゴを決定しました。現在、感謝記念礼拝、式典等、様々な記念事業を検討しております。

さらに、「立教女学院ビジョン2032」に掲げた施設整備計画実現のため、「創立150周年記念募金」を立ち上げ、募集を開始いたしました。

ここに、2025年度の事業報告書を作成いたしました。各学校での特色ある教育活動や立教女学院の諸活動のあらましについて本書を通じてお伝えすることで、本学院に対するご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

歴史と伝統の上に立ち、将来を見据え、教育活動を進めていく立教女学院に対して、皆さまのさらなるご理解とご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

学校法人 立教女学院



伝統と変革  
150<sup>+</sup>h

## <目次>

I 法人の概要.....	2
II 事業の概要.....	6
1. 法人.....	6
2. 中学校・高等学校.....	8
3. 小学校.....	15
4. 事務局.....	18

# I. 法人の概要

## 1. 創立目的

本学院は、学校教育を通じてキリスト教の福音を伝えるという目的の下、1877年米国聖公会の宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教により、日本における女子教育の先駆的な事業として創立された。その後、立教女学校、立教高等女学校の時代を経て、1931年には小学校、1967年には短期大学を設置し、キリスト教を基盤とする女子教育に足跡を残してきた。(短期大学は、2021年1月に廃止した。)  
「キリスト教に基づく女子教育」こそ、創立者の理想であり、本学院はその理想を実現するための教育活動を行っている。

## 2. 沿革

1877年9月	立教女学校開校
1908年4月	立教高等女学校と改称
1931年4月	附属尋常小学校設置
1947年4月	高等女学校が中学校、高等学校となり、小・中・高12年間の一貫教育体制確立
1963年4月	高等学校に専攻科併設
1967年4月	短期大学設立・英語科設置
1970年4月	短期大学に幼児教育科設置
1972年4月	短期大学に専攻科設置
2008年4月	短期大学附属幼稚園天使園設置
2013年4月	短期大学に現代コミュニケーション学科設置
2017年3月	短期大学英語科、専攻科英語専攻廃止
2019年9月	短期大学附属幼稚園天使園廃止
2021年1月	短期大学廃止

## 3. 設置する学校及び入学定員、児童・生徒数の状況

(2025年5月1日現在)

学校	入学定員	収容定員	在籍者数	入学者数	卒業者数
			2025/5/1	2025/5/1	2026/3/31
小学校	72	432	434	72	72
中学校	180	540	594	200	201
高等学校	180	540	557	194	180
合 計	432	1512	1585	466	453

## 4. 勤務員数

(2025年5月1日現在)

	教員		職員		計		合 計
	本務	兼務	本務	兼務	本務	兼務	
小学校	27	8	3	7	30	15	45
中学校	29	18	2	3	31	21	52
高等学校	30	13	7	5	37	18	55
事務局	0	0	17	4	17	4	21
合 計	86	39	29	19	115	58	173

(臨時職員・派遣職員等を除く)

## 5. 学校長

(2026年3月31日現在)

学校	学校の長	就任日
小学校	児玉 純	2025年4月1日(再任)
中学校	浅香 美音子	2023年4月1日
高等学校	浅香 美音子	同上

## 6. 理事・監事

(2026年3月31日現在)

理事・監事の 区別	選任区分		定数	現員	氏名	常務 理事	常勤・非 常勤の別	任期
理事長					大澤 眞木子		非常勤	4年以内 (*1)
院長					高橋 宏幸		非常勤	
理事 10人以上 13人以内 (現員11人)	1号	日本聖公会東京教区主教・ 理事選任委員会選任	1人	1人	高橋 宏幸		非常勤	4年以内 (*1)
	2号	院長・理事選任委員会選任	1人	1人	高橋 宏幸		非常勤	
	3号	学校の長・理事選任委員会 選任	2人又は 3人	2人	児玉 純 浅香 美音子	○ ○	常勤 常勤	
	4号	事務局長・理事選任委員会 選任	1人	1人	恩田 知代		常勤	
	5号	同窓会推薦・理事選任委員 会選任	1人	1人	佐々 義子		非常勤	
	6号	学外有識者・理事選任委員 会選任	4~6人	6人	大澤 眞木子 西田 邦昭 藤本 のぞみ 松谷 有希雄 田部井 善郎 牛嶋 洋一	○ ○ ○ ○	非常勤 非常勤 非常勤 非常勤 非常勤	
監事2人 (現員2人)	理事会選出・評議員会選任		2人	2人	木島 出 大日方 清剛		非常勤 非常勤	4年以内 (*1)

\*1…任期は選任後4年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで

## 7. 評議員

(2026年3月31日現在)

選任区分		定数	現員	氏名	任期
1号	チャプレン・理事会選任	1人又は2人	1人	須賀 義和	4年以内 (*2)
2号	専任教職員互選・評議員 会選任	4人	5人 (*1)	杉本 祥子 櫻井 麻理子 畠山 容子	
				毛利 みはる 小此木 俊昭	
3号	同窓会推薦・評議員会選 任	5人以上 8人以内	8人	川村 可子 重松 れい子 渡瀬 美南子	
				清水 則子 勝又 晃衣 伊藤 啓子	
				秋田 由美 山岸 悦子	
4号	学外有識者・理事会選任	5人以上 8人以内	6人	阿久津 小織 萩原 滋 露木 肇子	
				遠藤 弘良 村上 和夫 辻 宏	

\*1…経過措置により、2027年4月1日以後最初に招集される定時評議員会の終結の時までは5人となる。

\*2…任期は選任後4年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで

## 8. 会議

2025年4月1日～2026年3月31日の間

理事会		評議員会		常務理事会	
第 620 回	4 月 1 日(火)	第 362 回	4 月 1 日(火)		
第 621 回	4 月 21 日(月)			第 1 回	4 月 14 日(月)
第 622 回	5 月 26 日(月)	第 363 回	5 月 26 日(月)	第 2 回	5 月 19 日(月)
第 623 回	6 月 23 日(月)	第 364 回	6 月 23 日(月)	第 3 回	6 月 16 日(月)
第 624 回	7 月 14 日(月)			第 4 回	7 月 7 日(月)
第 625 回	9 月 18 日(木) ①	第 365 回	9 月 18 日(木)	第 5 回	9 月 12 日(金)
第 626 回	9 月 18 日(木) ②				
第 627 回	10 月 20 日(月)			第 6 回	10 月 10 日(金)
第 628 回	11 月 17 日(月)				
第 629 回	12 月 8 日(月)	第 366 回	12 月 8 日(月)	第 7 回	12 月 1 日(月)
第 630 回	1 月 26 日(月)	第 367 回	1 月 26 日(月)		
第 631 回	2 月 26 日(木)			第 8 回	2 月 16 日(月)
第 632 回	3 月 23 日(月) ①	第 368 回	3 月 23 日(月)	第 9 回	3 月 16 日(月)
第 633 回	3 月 23 日(月) ②				



## Ⅱ. 事業の概要

### 1. 法人

#### (1)「立教女学院ビジョン 2032」施設整備計画の実施

2025年4月21日の理事会において、本学院の将来構想である「立教女学院ビジョン 2032」が承認された。将来構想の中では2026年度以降の施設整備計画も示されており、その計画に基づき、9月に設計者を選定し、新棟建設の基本計画および学内機能再配置の基本設計を依頼した。2026年3月に設計者より作業結果が報告されたが、昨今の建設費や資材費の急激な高騰の影響により、本学院の当初予算を大幅に超える事業費の概算が示された。

そこで、2026年度夏までに計画内容、規模、スケジュール等の見直しに着手し、見直し案を作成する予定である。

##### ①小学校・中学校校舎地階～2階・ブリッジホール・聖マリア礼拝堂 LED 照明・空調室内機更新工事(年次計画)

・竣工から20年以上経過し、2024年度に小学校・中学校校舎の3階、2025年度に中学校校舎の地階～2階およびブリッジホールの照明LED化および空調室内機更新を行った。2026年度には小学校校舎の地階～2階および聖マリア礼拝堂の一部の更新を予定している。その後礼拝堂で残されていた部分の更新を2027年度に想定している。

##### ②マーガレットホール1・2階空調設備更新工事(年次計画)

・設置から20年以上経過し、1階小学校図工室の空調機は4台のうち1台が停止、残り3台も能力を抑えて運転していた。図工室は「立教女学院ビジョン 2032」再配置計画に含まれているため、暫定対応として2025年度に個別空調機を3台設置した。2階大会議室は2024年度に照明LED化を実施済みであり、2025年度は空調機を更新した。

#### (2)創立150周年記念事業の検討

2027年に創立150周年を迎えるにあたり、感謝記念礼拝、式典等について具体的な検討に着手した。

・創立150周年記念ロゴの作成

学院の全児童・生徒からデザインを募集し、各校で1次審査を行い、選ばれた作品6点の中から全教職員の投票による最終審査を行い決定した。

なお、2025年度の中学校卒業記念品として、このロゴを使用したステンドグラスが卒業生保護者から贈られた。

・2027年に実施する感謝記念礼拝、交流会、式典の日時を決定した。

・創立150年写真資料集の作成

2024年度から着手しており、2025年度は創立125年までの歴史を検証し直し、写真や文章の校正作業を行った。

#### (3)月刊「東京人」4月増刊「立教女学院の150年」発行

・立教女学院の150年の歩みとともに、現在の各学校の様子や今後目指す教育を広く社会に発信するために、本学院の歴史、建築物、教育、卒業生の活躍等の記事による月刊「東京人」4月増刊「立教女学院の150年」(都市出版株式会社)を2026年3月31日に発行した。

#### (4)財務

##### ①外注化等による業務効率化

・施設の管理及び校務業務の外注を一元化して、引き続き業務効率化を図った。また、経費削減を意識した業者選定等により支出の抑制に努めた。

##### ②学費水準の検討

・都内に設置されている私立学校の学費の調査を継続し、「立教女学院ビジョン 2032」最終報告書に記載の諸課題に対応できる資金計画を作成した。作成した資金計画に沿った学費の見直しを行い、東京都に学則変更届を提出し、2026年度学費の改定を行った。

##### ③寄付金募集活動の強化

・「立教女学院ビジョン 2032」に掲げた施設整備計画実現のため、「創立150周年記念募金」を立ち上げ、募集を開始した。

・「創立150周年記念募金」は、立教女学院未来創造募金と教育環境改善資金の2つから成り、前者は同窓生を始め

とする学院関係者のほか、一般の方からの募金を受け付け、後者は在校生保護者を対象に寄付を募った。

- ・立教女学院未来創造募金は、募集開始から3か月で、2024年度のFriends of St. Margaret'sの年間寄付金額の2倍強のご寄付をいただいた(Friends of St. Margaret'sは、従来までの募金活動の名称であり、2024年度の寄付金額は、およそ1,400万円であった)。
- ・本学院の取引先企業に対しては、「受配者指定寄付金制度」を利用した広報活動をおこなった。

#### 【評価】

- ・創立150周年記念ロゴについては、各校や事務局関係者の連携・協力により実現したことで、立教女学院全体が、150周年に向けて士気を高め、一体感を醸成する一歩となった。
- ・月刊「東京人」4月増刊「立教女学院の150年」の発行は、本学院の過去・現在・未来がよくわかる内容で構成され、これまで本学院のことを知らなかった人々にも理解していただけるもので、広く社会に発信することができた。また、本学院関係者が、改めて女学院のことを学ぶ機会となった。
- ・財政面のシミュレーションを行い、厳しい財政状況を踏まえ、2026年度学費改定を行うことを決定した。なお、施設設備資金、光熱水費等の維持管理費用の増大に備えるため、現在の教育充実費の一部を施設設備費として分離し、機動的な学費改定に対応できるようにした。

## 2. 中学校・高等学校

### (1) 学校運営

2025年度は、コロナの分類が5類へと移行してから3年目となり、新しくコロナ禍から学んだことを取り入れながらこれまで行ってきたこととの融合がなされ、学校生活がようやく軌道に乗ってきた1年となった。

授業は対面を基本とすることには変わりはないが、教科によってはコロナ禍で利用が高まったZoomでの授業参加を、出席停止の期間、体調が回復したらという条件で可としている。2025年度は入試直前にインフルエンザが大流行し、生徒・教師の罹患を回避するため、生徒を自宅待機とし、学校から行うZoomでの授業に切り替えた。これもコロナにより手に入れたICT技術のおかげである。今後も対面で授業を行うことを基本とするが、突然の事故などのときにZoomを利用することも考えられるので、生徒も生徒の家庭も教師も慌てないように、1年に1回はZoom利用の練習を行いたい。また、2023年度の高校1年生から順次Surfaceを導入し、本年度は高校生全学年でSurfaceを活用することになった。授業で使用するのはもちろんのこと、生徒会選挙の投票など課外活動でも積極的な利用を目指している。(ただ、2025年度後半は、ネットワークの不具合からSurfaceを思うように活用できなかった。)一方で、ICTの利用が本来の目的とはそれ、コピー&ペーストなど生徒たちにとってただ楽をするだけの技術として使われることのないように指導していかなければならない。生徒たちの理解度をより詳しく見るため昨年取り入れたデジタル採点のシステムは、その特性上利用しない教科もあるが、考査における出題の意図を確認しながら効果的に活用している。今後は入試の採点においても導入を検討していく。

行事では、従来7月に行われていた中学1年生のキャンプ時期についての検討がなされた。近年の温暖化による7月の暑さを回避するためにも、次年度は他学年と同様に6月に実施することになった。その他、コロナ禍で途絶えていた中学校のボランティアキャンプや高等学校の長期休暇中の特別養護老人ホームでのボランティア活動は、コロナ禍以前の勢いを取り戻し、新しくその歴史が作られつつある。国際教育関係でも、順調にこれまでの活動を取り戻している。アメリカの姉妹校の内1校(一番新しく姉妹校となったSt. Margaret's School)が閉鎖となった関係で、交換留学先の学校数が減少したが、今後は長年続けてきたその他4校との姉妹校関係を一層強固なものにしていきたい。体育祭においては9月のまだ暑い時期に行われることから、暑さ対策をこれまで以上に求められるようになった。生徒に関してはグラウンドに張る遮光遮熱テント数をさらに増やすことで、また保護者の方々に対しては屋内で映像を映すことで暑さ対策を行った。2026年度には外部施設の見学をし、2027年度からの利用を目指して検討を進めていく予定である。

2025年度より、友達との関係や起立性障害などさまざまな原因で他の生徒と一緒に教室での授業には参加できないが保健室までは来ることができる、いわゆる保健室登校の中学生のための部屋を開設した。週に4日、1日2時間ではあるが、指導教員を置き、生徒の指導に当たった。入室してもなかなか学習に向かえない生徒の対応に関しては今後の課題である。最終的には授業に戻れるようにすることを目指していきたい。

最後に、スラックス導入に関しては、生徒会と教員による約2年間の検討期間を経て、2025年5月7日より「学校にふさわしいものであるなら、スカートでもスラックスでもよい」として動き出した。現在は、各学年数パーセントの生徒がそれぞれの考える「学校にふさわしいスラックス」を着用している。“世の中の流行に惑わされることなく自分で考え判断し行動する姿勢”(入学式で宣誓される「私たちの誓い」)の中にある言葉を、今後も立教女学院として守っていきたい。

### (2) 教育内容の充実

#### ① 理数系授業の充実

2025年度も昨年から引き続き、大学や企業と連携した理科プログラムを実施した。表1に実施したプログラムの一覧を示す。

表1. 2025年5月から2026年2月に実施した理科・高大連携・産学連携プログラム

実施月	対象学年	連携先	内容
4月	中3・高1	くらしとバイオプラザ21	特定非営利活動法人くらしとバイオプラザ21の佐々義子氏のご協力を得て、昆布やイチゴなどからDNAを抽出する実験講座を実施した。
4月	小学生	立教女学院中高	立教女学院小学校の希望者を対象に、「豚の眼球解剖講座」の出張授業を行った。中高生10名がTAとして参加し、小学生の解剖のサポートを行った。
通年	高2	北海道ぎょれん	昆布講座(4種類の出汁の飲み比べなど)、ホタテ、シロサケ、ホッケ、スルメイカ、ニシンの解剖講座を行った。海産物の栄養にも触れ、食生活に応用できるような授業をしている。カズノコを作ったり、出汁の取り方を教えたり和食文化を伝える授業を行った。
10月	高1・高2	西尾レントオール	文化祭のステージ設営を、建設職人の指示を仰ぎつつ、生徒が自分たちでステージを設営する企画。

### 【評価】

立教女学院の理科教育では、単なる知識伝達にとどまらず、日常生活や社会との関連性を意識した学びを重視している。そのため、理科教員は平時から講演会や研修会に参加し、各自の興味関心に基づく探究活動を継続している。これらの取り組みについては、2025年度紀要において清水教諭が報告している。

今年度は、新たに特定非営利活動法人くらしとバイオプラザ21と連携し、中高生を対象としたDNA抽出講座を実施した。DNA抽出自体は多くの学校で行われているが、真昆布(藻類)を材料とした抽出は前例がなく、連携を通じて新たな知見を得ることができた。また、毎年実施している北海道ぎょれんとの連携講座では、高校2年生の文系コース生徒を対象に、和食文化を支える「出汁」をテーマとした学習を行っている。昆布や魚、貝から得られる旨味成分であるグルタミン酸・イノシン酸・コハク酸について、その化学的性質や生成過程を学ぶとともに、正しい出汁の取り方を体験的に学習し、実学的な学びを提供することができた。また、4種類の昆布(真昆布、羅臼昆布、利尻昆布、日高昆布)から取った出汁の飲み比べを行い、それぞれの昆布がもつ味や香りの特徴について学ばせることもできた。

毎年10月に実施しているステージの設営プログラムは、建築学部や理工系へ進学を希望する生徒にとって、キャリアを考える良い機会になっている。昨年、一昨年と参加した生徒は、建築学部へ進学をしている。今後も継続していきたい。

平時の授業においては、学力の三要素である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を育成するため、物理・化学・生物の全科目で実験を重視している。校内の植物や井の頭公園を活用したフィールドワークや探究活動も積極的に実施している。特に今年度は、高校3年生理系化学において、全39回中23回を生徒実験に充て、金属イオンの分離、メタン・アセチレンの生成、アルデヒド・ケトンの検出、エステル合成など、多様な実験を経験させることができた。こうした体験学習の効果もあり、2026年1月に実施された大学入学共通テストでは、受検者24名の平均点が72.5点を超え、近年で最も高い結果となった。問題の易化も一因と考えられるが、全国平均を14点上回る(全国平均58.4点)結果は、体験を通じた知識定着の高さを示すものであり、理科教育の充実を裏付けるものといえる。

2025年度の高校3年生理系コースの生徒は、医歯薬看護系志望者が多かった一方で、農学、生物学、応用化学、物理学、建築学、情報工学など幅広い分野に興味を持つ生徒も多く、国公立大学への挑戦者が非常に多い点が特徴であった。立教大学理学部には2名が進学している。合格実績としては、北海道大学医学部や筑波大学医学群をはじめ、東北大学薬学部、横浜市立大学理学部、帯広畜産大学畜産学部などから合格を得た。私立大学でも、早稲田大学基幹理工学部、慶應義塾大学理工学部・薬学部にて複数名が合格している。

理系コースの人数や進路希望は毎年異なり、生徒のニーズに応える難しさはあるものの、今後も塾的な問題演習に偏ることなく、自然の事象・事象を科学的手法で観察・実験し、原理や法則を見いだす力や態度を育成する授業を継続していく。また、学力の三要素を踏まえた評価方法についても、引き続き検討を深めていく。

## ②英語教育の充実

英語科の教員全員(非常勤講師やネイティブ講師含む)がiPadを所持し、ほぼ全ての授業で活用した。デジタルテキストやKeynoteなどのアプリに加え、各教室に設置されたモニターやプロジェクターを使い、音声と画像を多用した双方向型の授業を展開した。

中学生に対しては単語総復習テストに加え、英語力の高い生徒向けの特別課外授業を実施し、英語力の更なる向上を目指した。高校生に対しては、ケンブリッジ英検を実施したほか、高3に対してはオンラインのケンブリッジ英検講座にも取り組ませた。全学年共通の取り組みとして夏期補習を実施し、英語が苦手な生徒へのフォローアップに努めたほか、希望者を対象に個別の英検二次試験対策を行った。中学と高校それぞれでスピーチコンテストも開催し、英語力の高い生徒が力を発揮し、高め合える場を設けた。

### 【評価】

iPadなどのデバイスや各種アプリを活用し、4技能育成に向けて効果的な授業を展開することができた。各種検定や外部模試からも、生徒が着実に英語力を身に付けていることを示す結果が得られた。

## ③国際交流・国際理解教育の充実

次の取り組みを実施した。

表2 国際プログラム一覧

プログラム名	形態	国名	人数	備考
長期留学受入れプログラム	受入れ	アメリカ	1名	2025年8月30日～26年6月14日(約10ヶ月)に St. Stephen's Episcopal High School(SSES)から留学生1名を受け入れた。
短期留学受入れプログラム	受入れ	アメリカ	2名	2025年6月7日～6月22日に St. Margaret's School から留学生2名を受け入れた。
		フィリピン	2名	10月18日～28日に Trinity University of Asia High School から留学生2名と引率教員1名を受け入れた。
長期留学派遣プログラム	渡航	アメリカ	1名	SSES(約9ヶ月)に高1生徒1名を派遣した。
		ニュージーランド	1名	St. Margaret's College(約8ヶ月)に高1生徒1名を派遣した。
短期留学派遣プログラム	渡航	フィリピン	6名	2026年3月21日～3月28日に Trinity University of Asia High School に中3・高1生徒6名を派遣した。教員2名が引率した。
UC Davis 短期留学	渡航	アメリカ	22名	2025年8月5日～8月13日の9日間、カリフォルニア大学デイヴィス校に生徒22名を派遣した。引率教員は2名。現地大学生とともに英語でのディスカッションを行い、英語力や思考力を養いながら、キャンパスツアー、企業訪問、研究室訪問を通じて、知見を深め、自分の将来について考える機会とした。
グローバルスタディーズプログラム	—	—	中3—12名 高1—9名 高2—1名 計22名	2025年7月28日～8月1日。海外大学生を講師役に、少人数グループ(生徒5人前後)に分かれて、英語によるディスカッションやミニプロジェクトに取り組み、最終日に一人ずつプレゼンテーションを行った。

サマーイングリッシュプログラム	—	—	中1-118名 中2-16名 計 1134名	2025年7月28日～7月31日。少人数グループ(8名前後)に分かれて、外国人講師による発話中心の授業(ロールプレイやスキット(寸劇)を通じた発音、リスニング、スピーキングの訓練)に取り組み、最終日にスピーチを発表した。
SMIS (生徒による活動グループ)	—	—	22名(交流) 23名(教育)	<p>平和を作り出す者へと成長するために、校外の団体とも協同し、具体的な活動を通して国際的な態度と視野を身に付けることを目的としている。海外姉妹校との交流活動を中心とした「国際交流グループ」と模擬国連活動を中心とした「国際教育グループ」の2つに分かれて活動した。</p> <p>【交流グループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の諸問題をテーマにした新聞製作活動</li> <li>・文化祭教育展示</li> </ul> <p>【教育グループ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第9回全国高校教育模擬国連大会(国立オリンピック記念青少年総合センター)／第19回全日本高校模擬国連大会予選会(オンライン)・本大会(国連大学)等外部大会や他校主催の合同模擬国連会議への参加</li> </ul> <p>【交流・教育グループ合同】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サッカーボール・シューズ回収活動の実施</li> <li>・UNHCR とファーストリテイリング共催「服のチカラ」プロジェクトへの参加</li> <li>・日本ユネスコ協会連盟主催「寺子屋リーフレット制作プロジェクト」「書き損じハガキ回収活動」への参加</li> </ul>

#### 【評価】

新型コロナウイルスの影響により一時中断していた短期留学プログラムを昨年度より再開し、大きな問題なく順調に実施することができた。生徒の国際交流への関心や参加意欲は引き続き高く、実際の交流を通して異文化理解を深める貴重な機会となった。受入れプログラムについては、ホストファミリーの家庭はいずれも非常に協力的であり、生徒たちにとって温かく充実した交流の場を提供することができた。姉妹校であるアメリカ合衆国の St. Margaret's School が 2025 年 7 月に閉校したため、今年度が同校との最後の受入れおよび派遣の機会となった。なお、今年度は QMC 長期留学プログラムへの志願者がいなかったため、同校への派遣は実施されなかったが、その他の長期留学と短期留学は実施され、各プログラムへの関心は引き続き高かった。今後は長期留学への参加促進についても情報提供や支援の充実を図っていきたい。

プログラム全般としては、中1から高2まで各学年の成長段階に応じて構築された、本校ならではの国際プログラムが定着しており、学年が上がるごとに連続してプログラムに参加する生徒も多い。参加者からのアンケートなどを基に毎年改善を重ね、プログラムの質も向上してきている。海外姉妹校とのやりとりにおいては、異文化との交流を通して、多様性を重んじ、他者を受け入れ尊ぶ心が養われていると感じる。また、どのプログラムも、英語力の向上のみならず、世界に目を向け、世界の諸問題解決のために自ら考え行動する力を身に付けることを目指しており、生徒たちの意識や行動において、大きく成長している様子が伺える。

#### ④平和教育の促進

中学3年の長崎修学旅行、高校2年の沖縄修学旅行ともに、5月に予定どおり3泊4日で実施した。両学年ともに事前と事後、学級活動およびLHR、宗教(聖書)科授業で関連の平和学習を行った。

土曜集会においては、中学校は「隣人を大切にして平和な社会をつくろう」、高校では「広く世界に目を向けて、人間性を豊かにしよう」のテーマのもと、特に2025年度は戦後80年にあたり、サブテーマを「平和」に設定し、中高共通で通

常どおり講演会等を実施することができた。

各校生徒の宗教委員会と奉仕団体では、関係施設に留まらず、学内活動とともに学外施設への手作り献品、手作り品バザー益金を献金、フードバンク食品回収と食品仕分けと献品など、地域社会への支援を継続した。

## 【評価】

上記のことを通じ、どのような社会状況であろうとも平和学習や地域社会へのささやかな継続的支援を通して過去を記憶し、その重要性和責任を認識することによって、キリスト教学校として世界や社会に向けて貢献できることをあらためて確認した。

## ⑤教職員の質の向上

教職員は自己研鑽および新たな知識を得ることを目的とし、教育活動の質的向上に反映できるよう、様々な研修会や勉強会等に参加した。また夏期教員研修会では、今後導入を予定している校務システムへの変更を見据えて、複数のシステム会社から担当者を招き、説明を受けたのち、教員全体でどのシステムを採択すべきか、またどのように使用することが本校に適しているかを検討した。午後のグループごとの話し合いでは、少子化を見据えて、今後どのような入試広報活動を展開すべきか意見交換をした。その後の分ちあいで出された提案は次年度以降の広報活動に取り入れていく予定である。

ICT環境整備後、教員の授業でのタブレットPC活用は定着した。授業のみならず、校務でも使用頻度が増したことから、校務用と授業用のアカウントを切り替えて使用するなど、活用の幅が広がっている。昨年から引き続きICT支援室による「eラーニング」に、中高の教員も取り組み、ネットリテラシーに関する知識を深めるほか、AIに関する研修も受講し、本校でのAIに対する考え方を検討し、使用については生徒の思考を妨げないよう、一定の制限を設けるという方向性を示した。

また高1から1人1台教材として、Surfaceを購入しており、導入3年目の今年は高校3学年全員が使用することとなった。授業でのより積極的活用が求められることから、新しい授業形態等の試みに関しては、授業見学週間などを活用し、教員同士がお互いに学びあった。

教員同士のやりとりにGoogle Chat等を用いることがあるが、意思疎通は難しいことから、情報交換に留め、意見交換は対面で行うようにした。

また感染症の流行と中学入試時期が重なることから、今年度は急遽オンライン授業を実施することになった。今後もこのような状況は想定できることから、教員がオンライン授業に対応できるよう仕組みを整えていくことも肝要である。

## 【評価】

昨今、AIの発達やICTリテラシー教育について、教員も知識を習得する必要がある、教員研修が一層必要になっている。そのため、次年度2026年は試みとして、前期に1度教員研修の時間を行事予定に組み込むこととなった。

またICTの活用は授業においても校務においても、必要性が増している一方、生徒は授業のみならず、生徒会での選挙など、使用の幅が広がっている。しかし、学院のネットワークがつながりにくいなど、ICT活用が円滑に行われていない実情がある。教員のICT委員会と学院のICT支援室がより連携し、より良い学びに活用し、教員の校務効率化にも繋がるような使用を模索していきたい。

## ⑥入試広報活動の強化

2026年度入試は2月1日が日曜日に当たり、2月2日に入試を実施することになっており、辞退者の増加が見込まれるため、受験者数を増やすべく、イベントごとに内容を変え、受験生やその保護者に来校してもらう機会を増やした。

### i. 公開行事実施報告

#### ・学校説明会

第1回 5月14日(水) 対象:5、6年生の保護者1名 定員:400名 参加:340名

第2回 6月4日(水) 対象:小学生の保護者1名 定員:400名 参加:213名

第3回 7月2日(水) 対象:小学生の保護者1名 定員:400名 参加:134名

第1回~第3回:計687名(昨年度計:848名)

・校内見学会

夏(受験生向けミニ説明会あり) 6月15日(土) 対象:小学生親子 参加:午前 394組 午後 199組

秋①(5,6年生向け入試科目説明会あり) 9月20日(土) 対象:小学生親子 参加:午前 325組 午後 301組

秋②(教頭による学校説明会あり) 11月15日(土) 対象:小学生親子 参加:午後 299組

夏~秋②:計1518組 (昨年度計:1697組)

・生徒会による学校説明会 7月19日(土)

午前 聖マリア礼拝堂(5,6年) 対象:5,6年生親子 参加:236組

午後 聖マリア礼拝堂(5,6年) 対象:3~6年親子 参加:230組

午前・午後:計466組 (昨年度計:500組)

・入試科目説明【動画】 視聴予約数:753件(昨年度:503件)

・マーガレット祭

10月24日(金) : 受験生とその保護者3名まで 来校:206組

10月25日(土) : 受験生とその保護者3名まで 来校:1229組

2日間:計1435組(昨年度計:1593組)

ii. 学校主催 塾対象説明会 参加65名(昨年度:43名)

iii. 塾主催 学校説明会

・TOMAS 6月11日(水) @マルチメディアルーム 26組27名

・おぎしん 6月12日(木) @マルチメディアルーム 53組

・サピックス 6月18日(水) @講堂 82組

・グノーブル 6月19日(木) @聖マリア礼拝堂 50組

・四谷大塚 7月3日(木) @聖マリア礼拝堂 82名

・早稲田アカデミー 7月9日(水) @講堂 192名

iv. 学外企画学校説明会

・東京都私立学校展 5月18日(日)@東京国際フォーラム

・受験生なんでも相談会(声の教育社) 6月28日(土)@新宿三角広場

・日能研「学校フェア2025」 6月29日(日)@青山学院大

・帰国生対象学校説明会(早稲田アカデミー) 7月27日(日)@ベルサール渋谷ファースト

・帰国生のための学校説明会・相談会(JOES) 7月31日(木) @東京都立産業貿易センター・台東館

・東京都私立学校展 8月23日(土)、24日(日)@国際フォーラム

・日能研「私学のナカミを知る会」 6月5日(木) 高田馬場校

6月21日(土) 練馬校

7月16日(水) 赤羽校

・立教関係学校合同 学校説明会 9月27日(土)@立教大学(池袋キャンパス)

・キリスト教学校合同フェア 3月20日(金・祝)@青山学院中等部

・市進学院:オンライン学校説明会 6月26日(木)

v. 取材記事

・中学受験スタディ「帰国生入試特集」帰国生インタビュー 2025年9月16日配信

・中学受験スタディ「スクール特集」フィリピン国際交流プログラム 2025年9月16日配信

・インターエデュ「特集」体育祭学年ダンス 2025年11月11日配信

・読売オンライン「中学受験サポート」立教女学院の美術科の取り組み 2026年春配信予定

- ・『中学への算数』1月号(数学の授業の紹介) 2025年11月21日発行
- ・『プレジデント Family 冬』(音楽の授業の紹介) 2025年12月5日発行

上記2つは SAPIX 小学部 WEB「S サプリメント」にも掲載

- ・朝日小学生新聞  
「人気の有名中学校の魅力に迫る！学校探訪シリーズ」校長インタビュー 2025年12月6日発行

#### vi. 2026 年度入試結果

帰国生入試:9名出願 8名受験 → 3名合格 2名入学

一般入試:出願(郵送到着)585名 98名棄権 487名受験 → 142名合格 129名入学

立教女学院小学校からの入学者:69名

#### 【帰国生入試】

- ・昨年度入試から一般入試と同日に実施したため、出願者数の減少が続いている。

#### 【一般入試】

- ・東京では中学受験者数は全体的に微減。本校の受験者数は2025年度入試比で約40%増。
- ・今年度、辞退者数は大幅に増えた。辞退者の進学先は例年に比べ、多岐にわたっていた。公立一貫校へ進学する辞退者もいた。

#### vii. 2025 年度総括

- ・少子化 第2次ベビーブーム(1971~1974) 出生数年間約210万人→2025年出生数年間約70万人に。
- ・東京都の公立小児童数は現小4までは横ばい(約10万人)、小3以降急速に減少し、10年後には約7.8万人になる見込み。受験率は過去最高も、今後の受験生数の減少は避けられない。
- ・東京都の公立中高一貫校は1クラスの人数を減らすため、定員が削減された。
- ・2026年度入試の傾向  
サンデーショック・・・2015年とは大きく違う。2/1(日)は様々な学校に散らばった。  
神奈川のミッション校の中には前回のサンデーショックは移動したが、今回は移動しなかった学校があった。  
明治大学付属世田谷中学校・高等学校(旧日本学園) 共学化・7割が明治大へ推薦。  
入試問題が複雑化し、出題ミス・成績処理のミスが目立った。  
共学化・大学との連携を強化した学校が人気。

### ⑦立教学院との連携

高3の選択科目 ARE の授業に関連して、立教大学の協力をいただいた。

- ・7月23日に、立教大学の山口和範先生(経営学部)と安東慶太先生(社会情報教育研究センター)、則竹悟宇先生(社会情報教育研究センター)を招き、高3ARE履修者対象の「立教大学経営学部 統計教育プログラム」を実施した。統計の見方について演習形式で学んだ。
- ・夏期休暇中に、立教大学図書館の利用を行った。期間は8月1日~8月30日であり、池袋図書館・新座図書館の両方を利用することができた。  
高3が立教大学に進学するにあたって、立教大学の協力をいただいた。
- ・推薦決定後、各学部学科からの課題作成や大学での学びにそなえて、3月に立教大学図書館を利用することができた。

#### 【評価】

「立教大学経営学部 統計教育プログラム」「立教大学図書館 夏期休暇中利用」共に多くの生徒が参加し、論文の執筆に大いに役立てることができた。

### 3. 小学校

立教女学院小学校では建学の精神である「キリスト教に基づき、個性を尊重し豊かな人間性を養うこと」「人類の福祉と世界の平和に貢献する女性の人格の基礎をつくること」の実現のため、以下のような活動を行った。

少子化が急激に進む日本の社会において、立教女学院で学びたい、学ばせたいというご家庭の期待に応えられるように、積極的にしかも慎重に学校運営を進めるとともに、広報活動にも力を入れてきた。全教職員が一丸となって立教女学院小学校の教育を進めるとともに、小学校のスローガンである「讚美と祈り、笑顔があふれる立教女学院小学校」を目指し、伝統の人間教育・教科教育の土台の上に、新しい時代に必要となる資質・能力の育成にあたった。具体的には、知識や技能、思考力や判断力、表現力であり、学びに向かう力や豊かな人間性等である。そのため、本校では、本校の4本の学びの柱である・Green Lab・Blue Lab・Link・Global Educationを中心に据え、探究的で皆が意欲を持てるように様々な学びの場を設定し、学習活動を行った。

健康・体力に関しては、保健の授業、食育の充実などと共に、家庭との連携を深め、様々な啓発活動を実践した。また、遊具 Kids To Ki を含む遊び環境の確保と体育科を中心にした体力作り活動（縄跳びや持久走など）を推進し、心身共に健康な児童の育成に努めた。

#### 【評価】

2025年度も、キリスト教教育を基にした丁寧な指導を行った。このような取り組みを通して、児童が自分の力を伸ばし伸ばしと発揮し、自分と同じようにまわりの人も大切にしたい行動ができるように、一人ひとりを大切にしたい活動を行うことができた。あわせて、全国運動能力・体力テストにおいても全国平均を大きく上回る結果が得られた。

#### (1) 教学上の取り組み

##### ① キリスト教教育

- ・毎朝の礼拝、毎週の聖書の授業、イースターやクリスマスなどの諸行事を大切に行った。また、「自分を愛するように他の人を愛する」というキリストの教えが子どもたちの心の中で育まれていくよう、様々な場面で働きかけ、「将来は自分だけのためではなく、他の人の喜びや幸せのために自らが貢献できる人間に成長していく」ことに向けて努力を続けようとする意識を育てることに努めた。
- ・キリストの教えに従い、他者の存在を認め尊重する態度を培い、いじめ防止へ向けて早期発見・早期解決に努力した。

#### 【評価】

宗教主任を中心に、チャプレン・キリスト教センターと連携を取りながら、一つ一つの行事だけでなく、日常的に聖書の教えが子どもたちに浸透していくような取り組みができた。学年が上がるにつれ、「人のためにできることは何か」と考えられる児童が多くなっている。

一方、心無い言葉などにより児童同士が傷つけあう場面などがみられるため、継続的な指導が必要である。

##### ② 人間教育

- ・キリスト教教育に加え、各教科の指導、成長段階に応じた適切な保健指導や性教育、食育、動物介在教育等、様々な教科・領域の学習の機会を通じて、豊かな知識と教養を養い、自己および他者の存在を尊重することのできる豊かな人間性を育てるため、有益な直接経験や様々な自然体験の機会を計画的に実施した。
- ・カウンセラーや心理士等の専門家の助言を得やすいように、匿名での相談を受け付けるなど保護者や児童が相談しやすいような態勢を整えた。

#### 【評価】

カウンセラーとの相談方法が周知されたことで、相談件数も増えてきている。内容により校内のケース会議を開き、難しいケースでは専門的な助言を受けながら対応に当たった。心理士を助言者とする「学級経営報告会」を5月と12月に行い、全教員が各学級の課題を共有することができた。

一方、年度途中のカウンセラーの休職により、保護者に不安が広がった。

##### ③ 英語教育

- ・1年生から全ての学年でネイティブスピーカーを含めた少人数制での英語の授業を実施した。
- ・日本人の英語専科の教員を EC(English Coordinator) として位置づけることで、ネイティブスピーカーと

の連携・調整が深まり、充実した英語教育を行った。

#### 【評価】

テキストを変更し、今まで以上に児童の実態に合わせた授業を行うことができるようになった。専任の英語専科教諭がネイティブスピーカーとのコミュニケーションを密にすることで質の高い授業を展開できた。また6年生は学年発表会で英語劇「メリーポピンズ」を行い、英語学習の成果を発表した。

年度当初に採用したネイティブスピーカーが半年で退職したため、少人数グループが当初予定していた人数より多くなるなど影響が出た。

#### ④Green Lab

- ・3年生以上が参加する軽井沢キャンプでは、自然豊かな環境での共同生活とともに、トレッキングなどを通して直接自然と触れ合う機会を設けた。また、4年生のスタディツアーでは農業体験、5年生は田植えや稲刈りなど、6年生の南三陸では、農業、漁業、林業などを地域の方から直接学んだ。
- ・花と緑の溢れる学校となるように学級園での植物栽培や花壇の整備などを児童とともにいった。

#### 【評価】

自然と触れ合う体験活動によって、生き物やかけがえのないいのちを大切にしようとする思いを育むことができた。また、一次産業に携わる人たちの工夫や喜び、食の大切さを学ぶ機会とすることができた。

#### ⑤Blue Lab

- ・電子黒板やiPad、プロジェクター、大型ディスプレイなどの機器を効果的に活用し、日常の授業の中で探究的・協働的な学習活動を行った。また、プログラミングやプレゼンテーションなどの基礎的な知識や技能習得のための教育活動を実施した。
- ・インターネットリテラシー・マナーについて理解が深まるように繰り返し指導した。

#### 【評価】

iPadを中心に日常的にICT機器やアプリケーションを活用することで操作に慣れ親しみ、プレゼンテーションの技術なども向上した。

インターネットリテラシーについては、新しい技術や情報が次々に出てくるため、情報収集に努め継続的な指導が必要である。

#### ⑥Global Education

- ・オーストラリア Emmanuel Anglican College との国際交流プログラムでは、具体的な場面で英語を用いる能力の向上、多彩な異文化体験や多様な背景を有する人々とのコミュニケーションを深めることを目標として、2025年度も6年生希望者十数名がオーストラリアに渡航して直接交流を行った。
- ・立教英国学院及び立教小学校との連携により、8月には5年生10名程度が立教英国学院でのサマープログラムに参加した。

#### 【評価】

参加した児童は、それぞれが自分の目標を立ててプログラムに参加することができた。多様な人々や多文化との出会いによって広い視点が与えられ、将来に向かって新しい夢を持つことができた。また、現地の人たちや学校との絆を深めることができた。

参加しなかった児童や保護者に研修の成果を発表することで、学んだことや思いを共有することができた。

#### ⑦動物介在教育

- ・動物介在教育は、アイメイト協会からトレーナーや犬の派遣を受けて活動を継続した。6年生がバディウォーカーを担当するなど、生き物に直接触れ、世話をする活動を通していのちのあたたかさ、大切さを学んだ。
- ・視覚障害のある方のお話を聞くなど、障害者教育と結びつけた発展的な教育を全学年で行った。

#### 【評価】

犬がいることで、自分を無条件で受け入れてくれる存在を感じることができ、直接触れ合った時の温かさ柔らかさから、いのちのぬくもりに気づくことができた。

全校保護者会や公開授業等で活動について説明することで、保護者の理解を得られた。

## ⑧食育

- ・栄養教諭の資格のある管理栄養士を中心に、学校保健や学校給食と関連付けた食に関する教育を、生活科、理科、社会、Linkなどの教科と連携し、教科横断的に取り組んだ。

### 【評価】

児童および保護者の食に対する関心や理解を深めるとともに、伝統的な食文化や生命および自然を尊重する心を育てることができた。

## (2)教員研修の充実

- ・校内での教科研究を活発に行い、日本私立小学校連合や東京私立初等学校協会、キリスト教学校教育同盟など外部研究会の運営委員などを積極的に担うことで個々の教師の指導力を伸ばしていく様々な取り組みを行った。

### 【評価】

毎月の教科研修会は、国語・算数などの研究を計画的に位置づけ、外部講師を招いた授業研究会を行い、教科指導に対するよい研鑽の場となった。また、聖書の研究授業を行ったことで、専科教員も授業に関する指導力を高めると同時にキリスト教教育に関して全教員が理解を深めることができた。

## (3)学校運営面での対応

- ・中学校・高等学校と、学習や生徒・児童間の交流、教員間の交流など、様々な面で協力した。
- ・コンプライアンスを重視し、学院の諸規程を遵守した学校運営を行った。

### 【評価】

今年度も春休みに高等学校清水教諭による理科教室を実施できた。5年生11名が参加し、高校生の補助を受けながら、豚の目玉の解剖に挑戦した。また、部活体験(ハンドボール部・川越教諭)にも、希望者が参加した。教員同士もクリスマスの行事や親愛会の各イベントのほか、ソフトバレーボール大会などの交流を通して連携を進めることができた。

## (4)教育環境の充実

校舎内外の安全点検、修繕など、学院の中長期計画と連携して下記のような整備を行った。

- ①照明のLED化(1,2階部分)
- ②学校放送関連機器の点検整備
- ③聖マリア礼拝堂の放送設備や照明等の点検整備
- ④校舎・礼拝堂各所の経年劣化や不具合の調査、不具合箇所の補修
- ⑤AL ルームの ICT 環境の再構築
- ⑥マキムホールの施設・設備の更新準備

### 【評価】

予定通り整備が行われたものもあるが、2026年度に持ち越されたものもある。学院の整備計画に合わせて、よりよい教育環境を実現できるようにしていく。

## 4. 事務局

### (1)組織

#### ①立教学院との連携

- ・2025年度から、高校3年生が大学での学びの準備のために、3月に立教大学図書館を利用できるようになった。
- ・2025年度は両法人で行っている職員人事交流を安定的に継続することができた。

#### ②PDCAサイクルの定着

- ・2025年度初めに各自が2024年度総括を行い、2025年度の目標を設定した。所属長と課員、事務局長と所属長、事務局長と課員との面談を滞りなく実施することができた。

#### ③各部署の業務分析及び業務の見直し

- ・2025年度は、現在、経理課が行っている経理業務を、小学校事務室および中高事務室に移管することで、学院全体でより効率的に経理業務を遂行できる仕組みを、関係部署間で検討した。結論としては、経理業務にとどまらず、管理部門全体(総務・人事・経理)の業務効率化を最優先に検討する必要があることを確認し、仕組みづくりには至らなかった。2026年度は、よりよい事務組織体制の具体案策定に着手する。

### (2)施設・設備

#### ①PCB含有変圧器撤去・処分(年次計画)

- ・使用中の機器については処理期限が延長されたが、旧短期大学に保管されている低濃度 PCB 含有変圧器については、処理期限である2027年3月末までに撤去・処分を行う。

#### ②小学校・中学校・ラーニングセンター自動火災報知設備更新工事(年次計画)

- ・LED照明の更新と合わせて、2024年度に小学校・中学校・ラーニングセンターの受信機、小学校・中学校校舎3階の感知器、2025年度に中学校校舎地階～2階およびブリッジホールの感知器を更新した。2026年度には小学校校舎地階～2階および聖マリア礼拝堂の一部の感知器を更新する。その後礼拝堂で残されていた部分の更新を2027年度に想定している。

#### ③各所 ICT 設備更新工事

- ・2025年度中には、校務用パソコンの更新、各建屋間を結ぶ光ファイバーの引直し、サーバの設定不備への対応のため、同じタイミングでサーバの更新も行った。ネットワーク機器は教員間のコンセンサスが取れてから計画する予定となった。中高教室設置のワイヤレス画面投影装置更新については、教員のヒアリングの実施等事前検討をすることになり、2026年度以降に延伸となった。

#### ④電気設備・動力設備の更新

- ・経年劣化が進行している受電設備、弱電設備および動力設備について、予防保全および機能延命を目的とした定期点検を実施している。点検結果を踏まえ、緊急度および優先度を勘案し、2024年度は小学校・中学校の上水・雑用水加圧給水ポンプ、2025年度はラーニングセンターの配電盤・分電盤の更新ならびに電話交換機設備の更新を行った。また、処理期限が延長された低濃度 PCB 含有機器を使用しているマーガレットホールの変圧器については、学内再配置計画に基づき、受変電設備全体の更新を予定している。

#### ⑤その他業務

- ・令和7(2025)年度私立学校省エネ設備等導入事業費助成事業(東京都私学財団)から、中学校校舎およびブリッジホールへの省エネ設備補助金として 中学校分 10,000,000 円、高校分 3,024,000 円の交付を受けた。

### 【評価】

- ・PDCAサイクルについては、開始してまだ2年のため、今後も継続して、一人ひとりが、法人全体や各組織の方針を理解し、主体的に関わり、個人が成長して、組織全体が発展することを期待したい。
- ・経理業務に焦点をあてて従来の方法を見直す中で、総務や人事業務も関係しており、経理だけの課題として扱うことは難しいため、継続して検討することとなった。
- ・ネットワーク機器の更新を2026年度に行う予定で動いたが、2025年度中にそのための準備が整わず、2026年度初めにまず調査を行うこととなった。

[立教女学院 事業活動収支推移]

(単位 百万円)

年度		2023			2024			2025			
学生生徒等数		学生生徒等(1583)			学生生徒等(1585)			学生生徒等(1585)			
専任教員数 専任職員数		専任教員(84) 専任職員(32)			専任教員(87) 専任職員(29)			専任教員(86) 専任職員(30)			
事業活動収入の部	科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	
	教育活動収入	学生生徒等納付金	1,321	63.5%	39	1,211	57.9%	△ 110	1,255	59.1%	44
手数料		31	1.5%	△ 2	30	1.4%	△ 1	36	1.7%	6	
寄付金		100	4.8%	△ 13	98	4.7%	△ 2	54	2.5%	△ 44	
経常費等補助金		477	22.9%	△ 9	689	32.9%	212	685	32.2%	△ 4	
付随事業収入		55	2.6%	1	57	2.7%	2	58	2.7%	1	
雑収入		95	4.6%	71	9	0.4%	△ 86	37	1.7%	28	
教育活動収入計		2,079	100.0%	87	2,093	100.0%	14	2,125	100.0%	32	
事業活動支出の部		科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比
		人件費	1,531	59.2%	127	1,436	53.3%	△ 95	1,524	56.4%	88
		教育研究経費	931	36.0%	141	1,123	41.7%	192	1,019	37.7%	△ 104
	経常経費	610	23.6%	127	791	29.4%	181	655	24.3%	△ 136	
	減価償却額	321	12.4%	14	332	12.3%	11	365	13.5%	33	
	管理経費	122	4.7%	15	133	4.9%	11	156	5.8%	23	
	経常経費	101	3.9%	15	116	4.3%	15	140	5.2%	24	
	恩給・扶助料	3	0.1%	0	3	0.1%	0	3	0.1%	0	
	減価償却額	18	0.7%	0	15	0.6%	△ 3	14	0.5%	△ 1	
	徴収不能額等	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	
教育活動支出計	2,584	100.0%	283	2,692	100.0%	108	2,700	100.0%	8		
教育活動収支差額	△ 505		△ 195	△ 599		△ 94	△ 575		24		
教育活動外収入	科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	
	受取利息・配当金	50	100.0%	16	66	100.0%	16	43	100.0%	△ 23	
	その他の教育活動外収入	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0	
	教育活動外収入計	50	100.0%	16	66	100.0%	16	43	100.0%	△ 23	
	科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	
	借入金等利息	5	100.0%	△ 1	5	100.0%	0	5	100.0%	0	
その他の教育活動外支出	0	0.0%	0	0	0.0%	0	0	0.0%	0		
教育活動外支出計	5	100.0%	△ 1	5	100.0%	0	5	100.0%	0		
教育活動外収支差額	45		17	61		16	38		△ 23		
経常収支差額	△ 460		△ 178	△ 538		△ 78	△ 537		1		
特別収入	科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	
	資産売却差額	330	90.4%	330	616	95.4%	286	712	85.2%	96	
	その他の特別収入	35	9.6%	△ 21	30	4.6%	△ 5	124	14.8%	94	
	特別収入計	365	100.0%	309	646	100.0%	281	836	100.0%	190	
	科目	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	決算額	構成比	前年比	
	資産処分差額	10	83.3%	△ 1	2	50.0%	△ 8	114	49.1%	112	
その他の特別支出	2	16.7%	2	2	50.0%	0	119	51.3%	117		
特別支出計	12	100.0%	1	4	100.0%	△ 8	232	100.0%	228		
特別収支差額	353		307	642		289	604		△ 38		
予備費	0		0	0		0	0		0		
基本金組入前当年度収支差額	△ 107		129	104		211	67		△ 37		
基本金組入額合計	△ 54		△ 54	△ 169		△ 115	△ 470		△ 301		
当年度収支差額	△ 160		76	△ 65		95	△ 403		△ 338		
前年度繰越収支差額	△ 4,335		△ 155	△ 4,495		△ 160	△ 4,560		△ 65		
基本金取崩額	0		△ 81	0		0	0		0		
翌年度繰越収支差額	△ 4,495		△ 160	△ 4,560		△ 65	△ 4,963		△ 403		
事業活動収入計	2,494		412	2,806		312	3,004		198		
事業活動支出計	2,601		283	2,702		101	2,937		235		
基本金組入後収支比率	106.6%			102.5%			115.9%				
学生生徒等納付金比率	62.0%			56.1%			57.9%				
人件費依存率	115.9%			118.6%			121.4%				

\* 基本金組入後収支比率 = 事業活動支出 ÷ (事業活動収入 - 基本金組入額)

学生生徒等納付金比率 = 学生生徒等納付金 ÷ 経常収入

人件費依存率 = 人件費 ÷ 学生生徒等納入金